

樹種同定・炭化材同定

木材は、種類によって組織の特徴が異なるため、組織の違いから木材の樹種を同定可能である。生材（炭化していない材）は低湿地堆積物からの出土にほぼ限られるが、炭化材は台地上など乾燥した場所からも出土するため、台地上や山中における古植生に関する情報を得ることができる。

木材の種類を知るためには、右図に示す3断面（木口、柃目、板目）を光学顕微鏡や双眼実体顕微鏡、電子顕微鏡で観察し、種類を同定する。

森林資源が豊富な日本では、建築材をはじめ様々な用途に木材が利用されてきた。木材は、それぞれの性質を生かして、用途別に種類を使い分けるのが一般的だが、このような用材に対する選択は古くから行われていたようである。遺跡から出土した木材の加工品の種類を調べることによって、用材選択に関する変遷を知ることができる。

窯業や製鉄などの活動には、膨大な量の燃料材が必要となるため、周辺の樹木の大量伐採による二次林化などが想定される。生業と植生の移り変わりを調べるためには、燃料材としての樹種同定はもちろん、他の植物化石の情報を加味しながら、森林景観について多角的に検討していくことが必要である。



<生材>



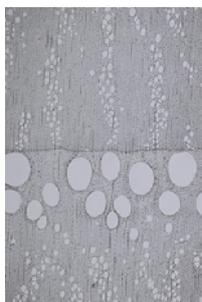
コナラ節(木口)



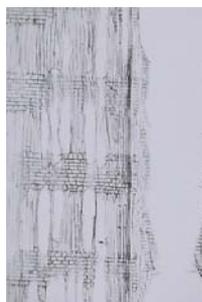
コナラ節(柃目)



コナラ節(板目)



クリ(木口)

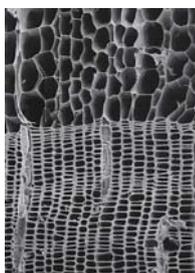


クリ(柃目)

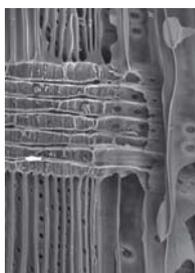


クリ(板目)

<炭化材>



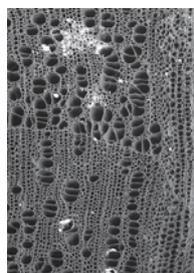
スギ(木口)



スギ(柃目)



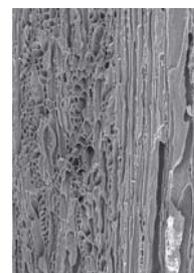
スギ(板目)



ハンノキ垂属(木口)



ハンノキ垂属(柃目)



ハンノキ垂属(板目)



水に強いクリの薄板で葺いた家(樽葺き)

と板(樽板)を貯蔵する施設

